

<調査速報>

ペルー北部高地エル・パラシオ遺跡の第一次発掘調査、2008年

渡部 森哉
(南山大学人文学部)

1. はじめに

筆者はペルー北部高地カハマルカ地方を事例として、インカ期 (A.D. 1400-1532)、ワリ期 (A.D. 600-1000) の社会動態を研究している。インカ、ワリという国家社会の地方支配の実態はどうだったのか。またカハマルカ文化は2つの国家社会に組み込まれつつも、なぜ長期間にわたって存続し得たのか。あるいは支配下に入った時、カハマルカの非国家社会はいかに変化したのか。このようなテーマを設定して調査を続けている。

2006年にはヘケテベケ上流域に位置するパレドネス遺跡で発掘調査を実施した (図1)。その結果、カハマルカ中期 B (A.D. 700-800) に建設、利用が始まり、カハマルカ中期 C (A.D. 800-900) にはチュルパと呼ばれる塔状墳墓が現れることが確認された [渡部2007]。中央アンデス全体の編年ではワリ期に対応する。また出土土器の大部分はカハマルカ文化の土器であるが、チュルパに共伴してティワナク文化的な人面土器、ケロ形土器が発見された。ティワナク文化の遺物としては最北の事例である。しかし地表から遺跡の広まりが観察でき、また遺物のレパートリーをある程度把握でき、年代も確認できたため、パレドネス遺跡のデータの量をただ増やすのではなく、それを解釈するための質の異なるデータを入手することを優先し、研究計画を立案し直すことにした。

ワリ期の社会動態を総体的に理解するためには、カハマルカ盆地に位置するエル・パラシオ遺跡の発掘調査をすることが必要不可欠であると考えていた。この遺跡は山地におけるワリ関連遺跡のなかでは最北の事例として位置づけられ [cf. Schreiber 1992]、筆者らはその調査に2008年に着手した [Watanabe and Peña Martínez 2009]。

2. エル・パラシオ遺跡

エル・パラシオ遺跡はペルー北部高地カハマルカ県カハマルカ郡ロス・パーニョス・デル・インカ区に位置する (図1)。壁龕墓で有名なベンタニーリヤス・デ・オトゥスコ遺跡付近のミラフ

ロレス村にあり、日本調査団によって1982、1989年に発掘調査が実施されたコルギティン遺跡の西側の麓に広がっている。

この遺跡が初めて言及されたのは、レシュレン夫妻による報告においてである [Reichlen and Reichlen 1949]。その遺跡分布調査において「タンボ・デ・オトゥスコ」の名称で登録され、インカ期に時期比定された。その後、1960年代にルイス・ルンブレラスがこの遺跡を訪れ、次のように記している。

「カハマルカ盆地の別の地域における大都市センターは、土壌と植生によってほとんどまったく隠されている。それは、ワリのそれに似た、加工石製の貯水池と行政センターを含み、現在耕地になっているので、それとすぐ見わけがつく（ただし遺跡はそのため大分損傷をこうむっている）。『ラ・ベンタニータス・デ・オトゥスコ』という名の巨大な墓地には、カハマルカ III と IV (ティワナコイデ) の土器がたくさんあり、純粋にワリ・スタイルの装飾を持つ土器片がたくさん集められている。」 [ルンブレラス1977: 181]

その後、ロツヘル・ラビーネスがこの遺跡をワリ期に時期比定している [Ravines 1985]。ウィリアム・イズベルはワリ様式土器を収集し [Isbell 1988: 186]、その後コルキティン・パラシオと

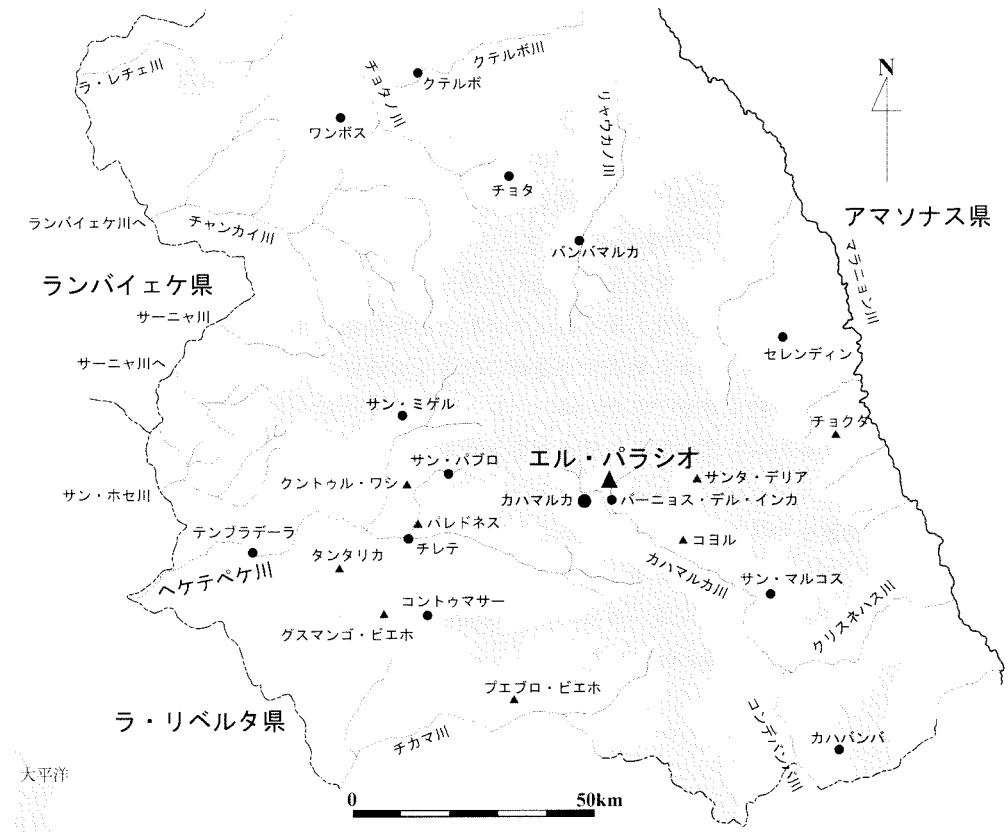


図1 エル・パラシオ遺跡の位置 (●現代の町、▲遺跡、灰色部は標高3000m以上)

いう名で言及している [Isbell 2001]。寺田・松本はカハマルカ盆地における発掘調査でワリ様式土器を発見しているが、エル・パラシオ遺跡に直接言及していない [Terada and Matsumoto 1985]。またカハマルカ盆地で遺跡分布調査を実施したダニエル・ジュリアンはワリ様式の土器を1点も拾えなかったが、この遺跡をワリ文化の遺跡として同定している [Julien 1988: 240-241]。2001年から2003年にかけてカハマルカ盆地で遺跡分布調査を実施した関雄二らは、エル・パラシオでワリ様式の土器を1点のみ採集している [Seki, Ugaz and Watanabe 2001]。

ルンプレラスを例外として、多くの考古学者はエル・パラシオ遺跡のおよそ60 × 45 mの大きさの矩形建造物だけに注目してきた。筆者はこの建物の周囲を踏査し、聞き取り調査し、多くの考古学者が訪れた矩形建造物が巨大な遺跡複合の一部の過ぎないということに気がついた。ルンプレラスの観察を再確認したことになる。またカハマルカの収集家が所蔵するワリ様式の土器のほとんどが、このエル・パラシオ遺跡の位置するミラフロレス村から出ていると予想できた [Watanabe 2002]。

これまでペルー北高地におけるワリ支配の拠点として、カハマルカよりも南のワマチュコ地方のピラコチャパンパ遺跡が挙げられてきた [Topic 1991; Topic and Topic 1985, 2001]。しかし調査者のトピック夫妻は、その遺跡が建設途中で放棄されたと主張し、放棄年代を A.D. 700頃と推定した。しかしその後、ワリはペルー北高地から撤退してしまったのだろうか。

ワリ遺跡を含むワリ文化の遺跡ではカハマルカ様式土器が多く確認されている。またヘケテペケ川下流域に位置するサン・ホセ・デ・モロ遺跡では、カハマルカ文化の土器がワリ様式土器とともに出土する [Castillo 2001]。それらの多くはカオリン粘土で製作された Cajamarca Floral Cursive というタイプであり、それはカハマルカ中期 B の A.D. 700-800頃に時期比定される。それはピラコチャパンパ遺跡が放棄された後の時代である。これをどのように説明すればいいのか。カハマルカがワリと対等の立場にあったのか、あるいはルンプレラスが考えるように「北部高地で、ワリはカハマルカを征服したが、カハマルカ土器はひじょうに権威高いものでありつづけ、ワリで使われたばかりでなく、モチエを含む多くの他地方にくばられた」 [ルンプレラス1977: 179] のか。筆者は、カハマルカ文化のカオリン土器の分布は単なる土器の交易ではなく、メンゼルが考えるように、インカ帝国におけるミティマエスのような政策の結果、つまりワリの支配下における人の動きに起因すると想定している [Menzel 1964: 72; Watanabe 2002]。そしてカハマルカに A.D. 700年以降に機能したワリのセンターがあるはずであり、その候補がエル・パラシオ遺跡であった。

3. 調査の経緯

発掘調査は2008年8月12日から9月13日にかけて行われた。まず地表から見える矩形建造物周辺を A 区と命名し、その全体の大きさと構造を確認することから調査を進めた。その後調査区域を南に移し、B 区と C 区の発掘を行った (図2)。

3-1. A 区

地表から約60 × 45mの大きさの建物が確認でき、幅約60cmで高さ4mの壁が残存している

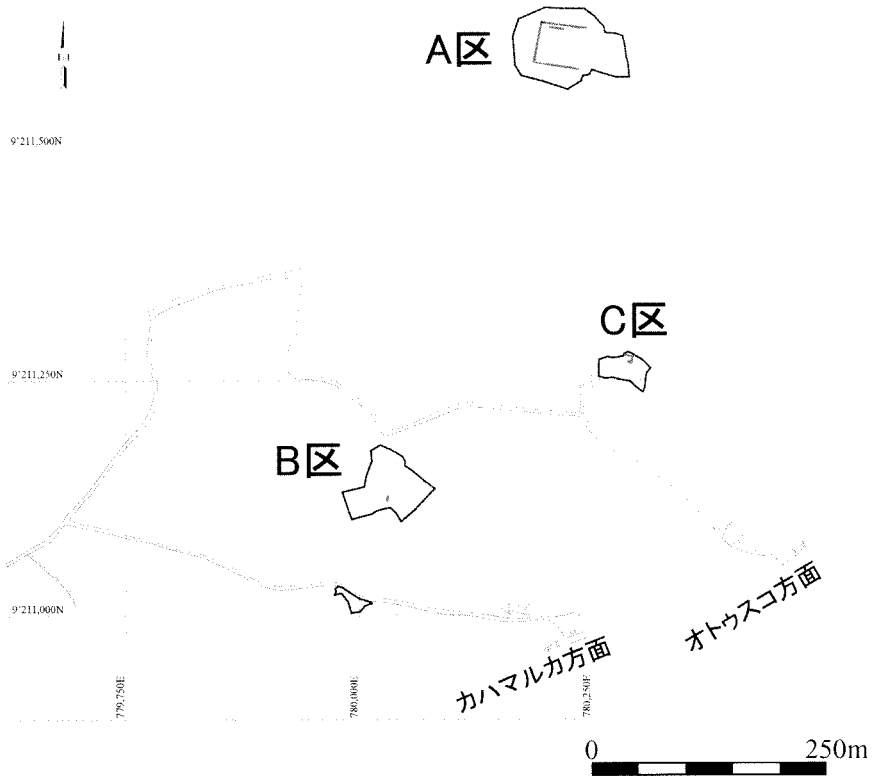


図2 発掘区の位置

(図3)。ワリ文化の建築の特徴を示しており、カハマルカ文化の建築に比べて壁が厚い。東西方向に長く、北壁、西壁、南壁は残存しているが東壁は確認できない。また建物の内部には北壁にほぼ並行の1本の壁 (AM1) を確認できる。ワリの矩形建造物は外側の壁を最初に建て、その後内部を分割するという建設順序が知られているため、この壁 (AM1) がどのように連結しているかを確認することが有効と考えられた。また建設時期を決定するため、床下、あるいは壁の基礎のレベルまで掘り下げて遺物を収集した。計7つのトレンチを設定した (図4)。



図3 A区矩形建造物の北壁 (西側より)

トレンチ A1では、建物内部に確認される唯一の壁 AM1の延長を確認する目的で設定された。その結果、AM1の西端が確認され、他の壁とは連結していないことが明らかになった (図5)。その後、建物の北壁を東に追い東壁とのコーナーを確認すると同時に AM1の東への延長を確認する目的でトレンチ A3、A4、A6、A7を設定した。

その結果トレンチ A6で AM-1の東端が確認でき、他の壁とは連結していないことが明らかと

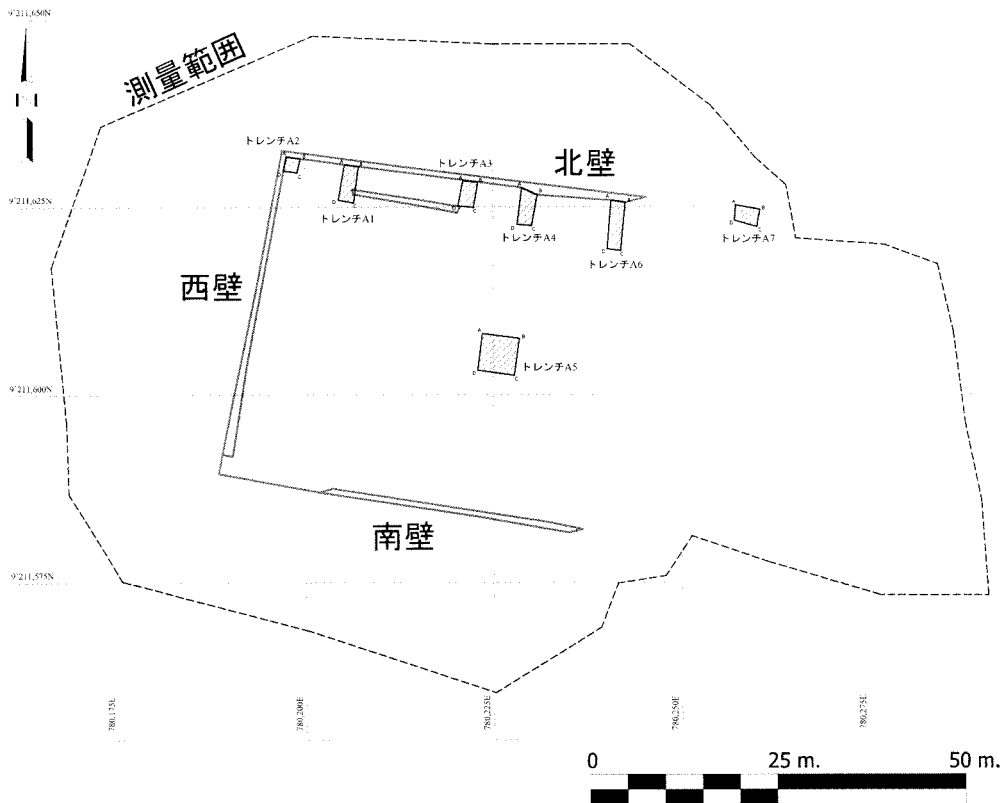


図4 A区の特レンチの位置

なった(図6)。AM1の長さは37.5mであり、北壁に対しやや斜めになっており、2つの壁の間の幅は西端で3.3m、東端で4.6mである。またトレンチA7では、北壁が長さ62.5mの地点で終わっていることが判明した(図7)。東壁は確認できなかった。

発掘データを総合すれば、この建築物は東壁を立てる前に建設途中で放棄されたと考えられる。また、壁の基礎のレベルよりも下からカハマルカ後期の土器タイプ Cajamarca Semicursive が出土したことから、建設時期をカハマルカ後期のはじめのA.D. 900-950頃と想定している。

西壁と北壁のコーナー部分にトレンチA2を設定し、西壁の方が先に立てられたことが確認された。土地は東から西へ傾いており、東の斜面を崩し、西に土を盛って整地するという順序で建設が進められた。つまり西壁をはじめに立て、次に北壁と南壁の建設が東方向に向かって進められた。西壁、北壁、南壁に出入口が確認できないため、おそらく建物の出入口を東に作る予定であったと考えられる。また建築の中央部に5×5mの特レンチA5を設定したが、建築物などは見



図5 AM1の西端(トレンチA1、南側より)

つからなかった。

エル・パラシオ遺跡の建設年代はカハマルカ中期 A の終わり、もしくは中期 B のはじめと想定していたが、A 区の矩形建造物は想定よりもかなり新しいカハマルカ後期に建設が始まったことが明らかになった。そのためカハマルカ中期に対応する建築が他の場所にあるはずであった。

3-2. B 区

A 区の矩形建造物は遺跡の北端に位置し、それよりも南に遺跡の中核部があると予想できた。しかし大部分が畑や牧草地の下になっており、地表からはほとんど何も観察できない。また土地が多く地主の間で分割されていたため、発掘するための許可を与えてくれる地主をさがす必要があった。

よく観察すると、高さ30cm 長さ5m 程度の壁 BM1 が確認できた (図8)。ワリ期の建築の壁であるかどうかは全く分からなかったが、想定さ

れる遺跡の内部に位置するため、地主と交渉し発掘調査を実施した。その周辺は B 区と命名された。4×8m の大きさのトレンチ B1 と4×4m の大きさのトレンチ B2 を設定した (図9)。

地表から10cm 程度掘り下げただけで大量の遺物、建築の壁が姿を現し始めた。それは壁が直行する設計であり、ワリ文化の建築であると考えられた (図10；図11)。また出土遺物の多くはカハマルカ文化の土器であったが、ワリ様式土器も含まれていた。またトレンチ B1 では無遺物層まで達したが、ここではカハマルカ中期 B のはじめ、つまり A.D. 700 頃に利用が始まったことが明らかとなった [cf. Watanabe 2009]。遺跡の全体の広まりが不明であるため、どこから建設が始まったかは分からないが、エル・パラシオはワリ国家の支配下で建設されたと考えられる。

土器の証拠からカハマルカ中期 A の終わりにはワリとカハマルカの間に接触があったことは確かであるので、遺跡の他の箇所で中期 A に遡る建築が確認される可能性は大いにある。エル・パラシオの建設はそれまで利用されていなかった更地で始まっており、既存の建築が再利用された証拠はない。またカハマルカ後期のはじめまで連続的に利用されたが、その後の建築は確認されていない。カハマルカ後期には建築は埋められ、その場所は同じくカハマルカ後期に二次埋葬の場所として利用された (図12)。B 区において建設活動がカハマルカ後期まで続いたとい

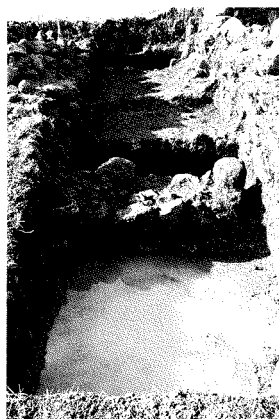


図6 AM1の東端
(トレンチ A6、南側より)



図7 北壁の東端
(トレンチ A7、東側より)



図8 BM1 (南東側より)

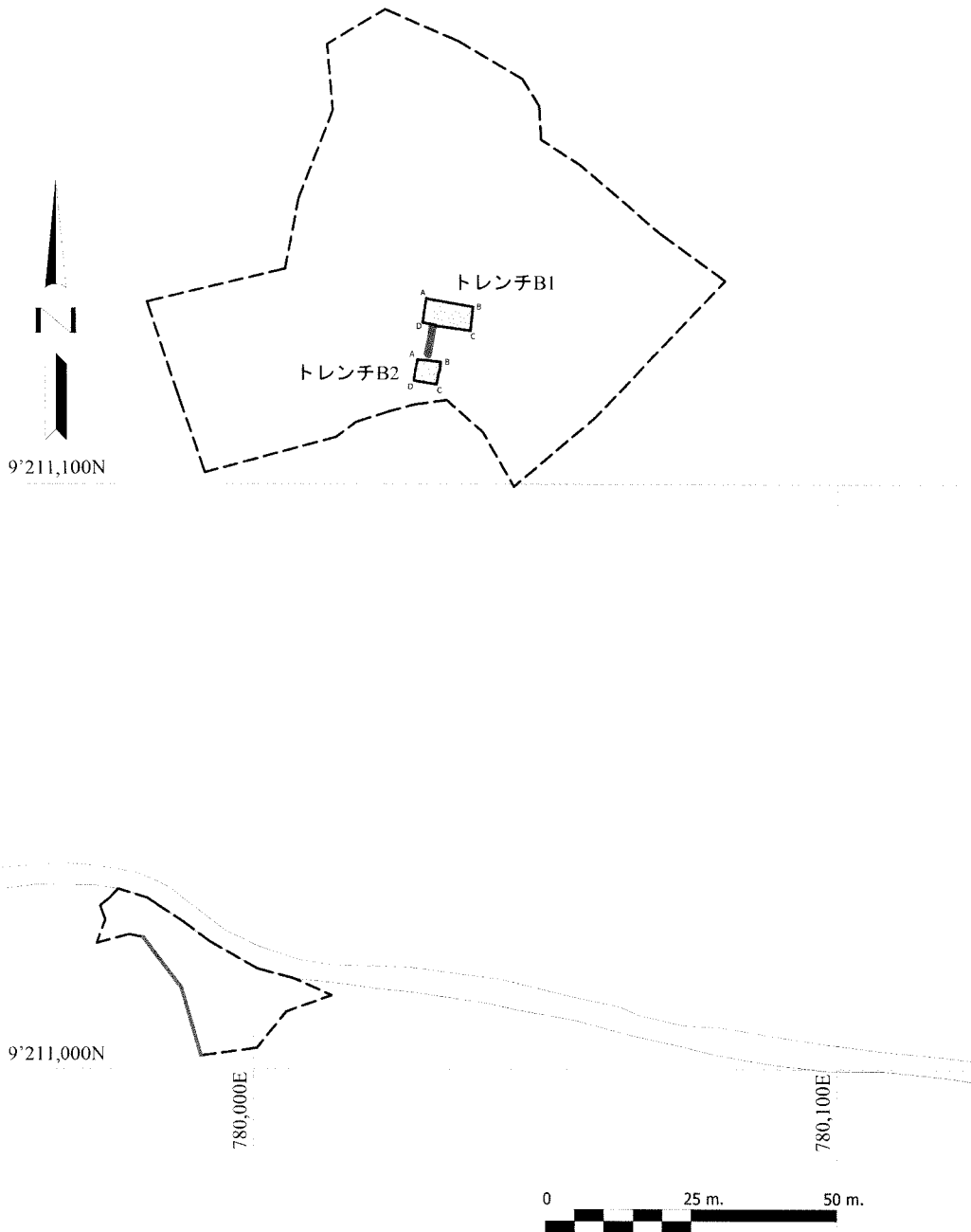


図9 トレンチ B1、トレンチ B2の位置



図10 トレンチ B2 (南側より)



図11 トレンチ B1 (西側より)



図12 B区第1号墓 (カハマルカ後期)

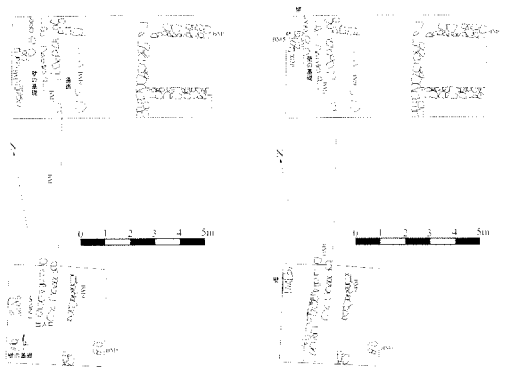


図13 B区第1建築フェイズ

図14 B区第2建築フェイズ

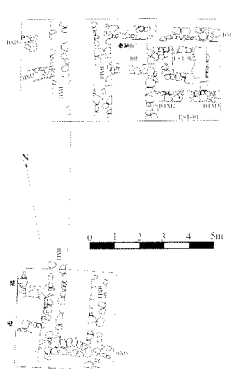


図15 B区第3建築フェイズ

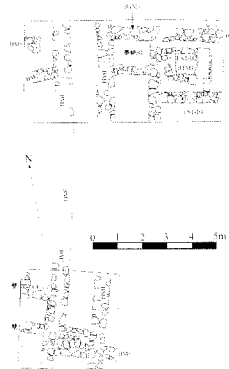


図16 B区第4建築フェイズ

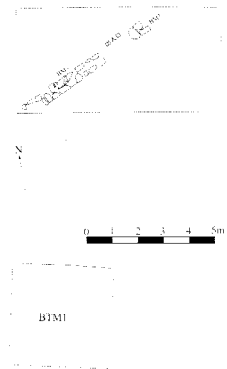


図17 B区第5建築フェイズ

うことは、A区の建築がカハマルカ後期に始まったというデータと合致する。ワリの支配は当初想定していたよりも長い期間続いたことは明らかである。放射性炭素年代測定値はまだ得られていないが、エル・パラシオが機能した期間はA.D. 700-950と想定している。つまりワリの支配によって始まり、ワリの支配の終焉とともに放棄されたといえる。

通常ワリ文化の遺跡は水平方向に広がっており、同一地点での建て直しが行われることはまれである。ところがエル・パラシオ遺跡B区では、建築の改修の証拠が確認され、5つの建築フェイズを設定することができた(図13-19)。こうした垂直方向の建築の重なりが確認されている

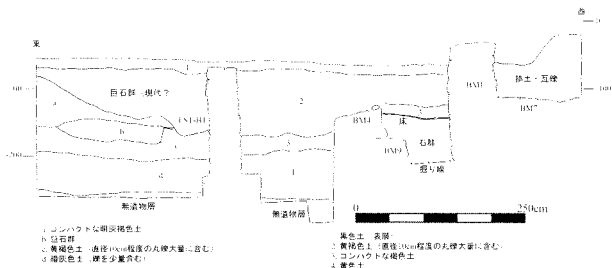


図18 トレンチ B1南面断面図
(水準点の高さは標高2715.50m.)

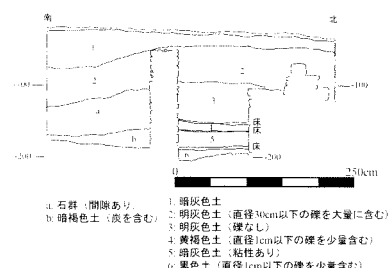


図19 トレンチ B2西面断面図
(水準点の高さは標高2715.50m.)

のは、これまで首都ワリ遺跡以外にはクスコ県のワーロ遺跡群のみである [Glowacki 2002; Zapata Rodríguez 1998]。

トレンチ B1では墓室と思われる半地下式の構造物 EST-B2を確認した (図20)。内部の大きさが97cm (北)、90cm (西)、94cm (南)、86cm (東) と多少いびつであるが、これはそれ以前にあった構造物のスペースに組み込まれて建設された結果である。また内部に小さい壁龕を伴っていた (図21)。南の壁龕は高さ22cm、幅24cm、奥行き26cm、東の壁龕は高さ20.5cm、幅20.5cm、奥行き15.5cmの大きさであった。上部が崩壊していたため、北壁と西壁には壁龕は残存していなかった。内部の底には一枚岩の巨石が敷かれていた。蓋として平石が置かれていたが、地元農民によって割られ、一部が他の場所に運ばれ、水路の蓋として再利用されている。構造物内部の底から蓋の上部までの高さは1.5mある。東の外床のレベルは構造物内部の床よりも70cm高く、



図20 EST-B2 (北側より)



図21 EST-B2内部の壁龕 (右が南、左が東)



図22 黒色長頸壺1 (EST-B2出土)

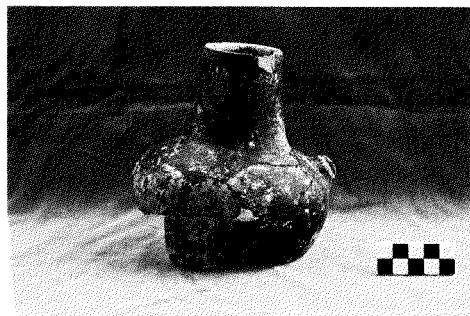


図23 黒色長頸壺2 (EST-B2出土)

半地下式の構造となっている。ワリ遺跡のチェコ・ワシ地区の構造物と類似した設計である。

構造物 EST-B2は荒らされていたため、内部に何が置かれていたかは不明であるが、墓であることは間違いないであろう。排土中からワリ文化の黒色長頸壺2点（図22；図23）、および橙色の緻密な胎土の多彩色土器の破片、人骨片などが確認できた。また EST-B2の外側の南、西、東の床上、床下から奉納物が確認できた。床下の遺物はこの構造物の建設と同時期であり、床上の奉納品は埋葬時に伴うものである。

南側の構造物 EST-B1の床下では墓が2基確認できた。北西コーナーで確認された B 区第2号墓 (BTM2) には完形土器2点を含む副葬品が数点あった (図24)。一つは中空の四脚付きの四角い碗である (図25；図26)。4面全てに人面が立体的に表現されている。カハマルカ中期 A の土器タイプ Cajamarca Classic Cursive と類似した文様を備えている。もう一点は内部にネガティブ技法で施文した三脚土器である (図27；図28)。同様に床下で、BTM2の東の箇所で見られた B 区第3号墓 (BTM3) は高台付きの小型碗4点とスプーン4点を伴っていた (図29)。これらは EST-B2の建設と同時期に行われた埋葬である。

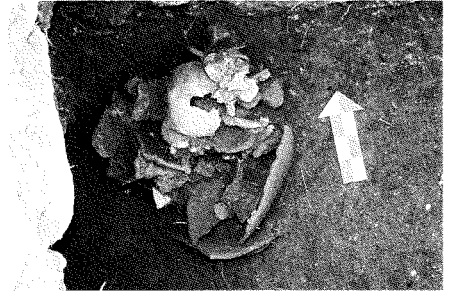


図24 B 区第2号墓

EST-B1の床上の覆土からは大量の土器片が出土した。その中に灰色のネコ科動物の土器2個体の破片が含まれていた (図30；図31)。顔の表現はペルー北海岸のモチエ文化の系譜に繋がると考えられる。EST-B1を完掘していないため全てのパーツは揃っていない。これは EST-B2内部の埋葬と同時期に比定される。

EST-B2の西側には大きさ140×100 cm で、入り口の幅40 cm の小さい小部屋状構造 (BR1) があった。床下からは完形土器が7点出土した (奉納 B2；図32)。中でもワリ文化によく見られる山形文様付きの動物象形土器が特徴的である (図33)。現在ではアマゾンの方に生息する動物ペッカーリーに見える (鶴澤和宏 私信2009)。

その後、BR1の入り口が閉鎖され、内部床上に奉納 (奉納 B1) がされた。大量の土器片が含まれていたが、全て割れていた。その中にワリ様式の橋形把手付き双注口壺があった (図34；図35)。またティワナク文化的な文様を刻線で施されたスプーン破片が2点含まれていた。リラ形 (断面が縦琴形) コップの土器片も出土した。

東側、すなわち入口側では床上の覆土からリラ形土器2点 (図36；図37)、スポンディルス貝の加工品の破片数点が出土した。発掘範囲が狭いためさらに奉納物は東に続くと思われる。

さらに奉納 B1の後の時期に比定される、B 区第4号墓 (BTM4) が確認された。BR1の北の壁を壊して、上から掘り込まれている。高台付き碗2点を伴っていた。

EST-B2の建設、内部の埋葬は第3建築フェイズ、第4建築フェイズに対応し、全てカハマルカ中期 B から中期 C はじめに比定される出来事である。そして最後の第5建築フェイズに全く方向の異なる壁が建てられた (図17)。カハマルカ後期、もしくはカハマルカ中期 C に時期比定される。そして建築全体が埋められた後、カハマルカ後期に二次埋葬 (BTM1) の場として利用された。その後には活動の痕跡は認められない。



図25 四人面付き四脚土器
(B区第2号墓出土)



図26 四人面付き四脚土器
(B区第2号墓出土、内側)

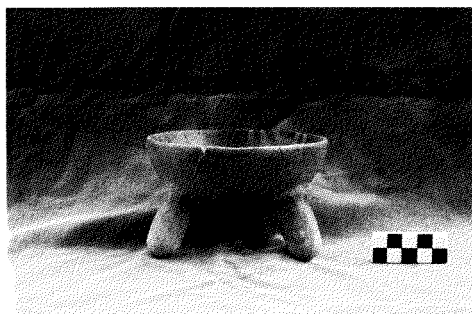


図27 ネガティブ文様三脚土器
(B区第2号墓出土)



図28 ネガティブ文様三脚土器
(B区第2号墓出土、内側)

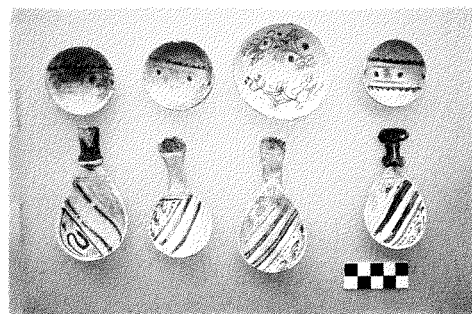


図29 B区第3号墓の副葬品

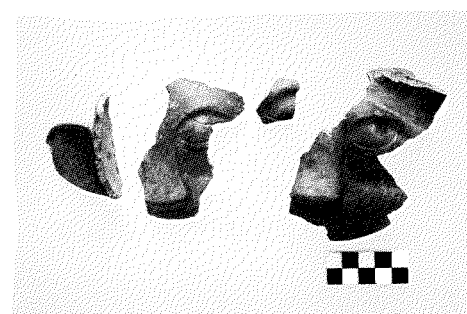


図30 猫科動物象形灰色土器
(EST-B1出土、顔)



図31 猫科動物象形灰色土器
(EST-B1出土、四肢)



図32 B区奉納 B2

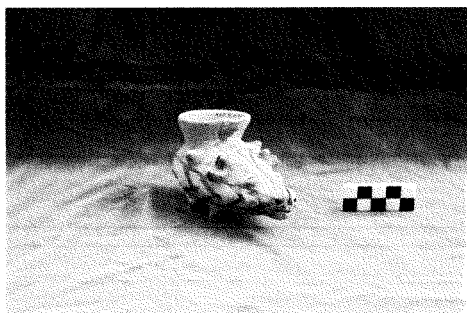


図33 動物象形土器 (奉納 B2出土)



図34 橋形把手付き双注口壺
(奉納 B1出土)



図35 橋形把手付き双注口壺
(奉納 B1出土、裏側)



図36 リラ形土器1 (EST-B2の東出土)

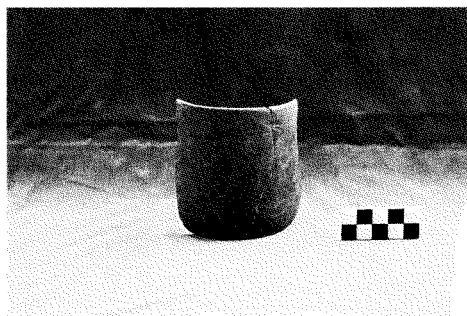


図37 リラ形土器2 (EST-B2の東出土)

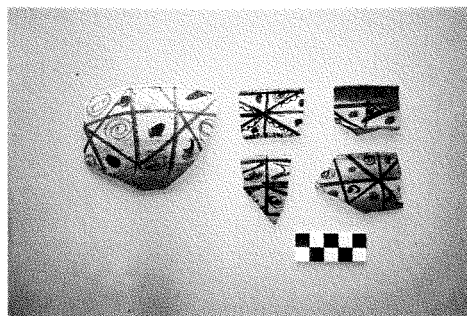


図38 Cajamarca Floral Cursive
(カハマルカ中期 B、外側)



図39 Cajamarca Floral Cursive
(カハマルカ中期 B、内側)



図40 Cajamarca Floral Cursive
(カハマルカ中期 C、外側)

3-3. C区

遺跡の東への広まりを確認するため、C区を設定した。先スペイン期と思われた建築物の内側コーナーに3×3mの大きさのトレンチC1を設定した。その結果、壁は現代の壁であることが判明した。トレンチC1ではワリ期の建築は確認できていないが、最下層からワリ様式土器が出土しているため、ここまで遺跡は広がっている。

地表からはほとんど建築は確認できないが、本来壁石であったと思われる石が土地の区画のために積まれている。またB区よりもさらに南にワリの建築と考えられる壁がいくつか確認できる。こうした状況証拠を総合するとエル・パラシオは少なくとも40ヘクタールの広まりを有するといえる。

4. 出土遺物の予備的分析

約700kgの土器が出土した。出土土器の全てに目を通し、口縁部破片をタイプ分類した。9割以上の土器がカハマルカ文化のものである。非カオリン土器の多くはCajamarca Coarse Redというタイプの土器である。

カハマルカ中期Bのカオリン土器Cajamarca Floral Cursive (図38；図39)が、B区最下層から出土している。大部分が高台付き碗である。カハマルカ中期Cにはやや粗く、三脚付き碗であるCajamarca Floral Cursiveが製作された(図40；図41)。エル・パラシオはカハマルカ後期のはじめまで建築活動が続いたが、それに対応する土器はCajamarca Black-and-Orange (図42；図43)、およびCajamarca Semicursive (図44；図45)である。前者はこれまでカハマルカ盆地ではあまり報告されていない土器タイプである。後者は長い三脚付きの碗が特徴的な器形である(図46)。

他にワリ文化の土器(図47；図48)、海岸カハマルカと呼ばれる土器片(図49；図50)、ペルー北海岸系の土器(図51)、橙色の緻密な胎土で表面を多彩色で施文した土器片(図52)などが出土している。こうした土器の多様性は、ワリの支配下における人間集団の動きと連動すると考えられる。一方、建築はカハマルカ文化のものではなく、ワリ文化の特徴を示している。建築と土器の文化的意味を考察する必要がある。

また黒曜石の破片が出土している。石クズであるため、原料が持ち込まれて、ここで石器製作が行われたと考えられる。南のカイエホン・デ・ワイラスで出土した黒曜石は南高地のキシピサ産であるが[Lau 2005]、エル・パラシオも同様であるかどうか確認する必要がある。

また大量の獣骨が出土しており、ラクダ科動物利用の活発化を示唆している。さらに農具と考えられるT字形打製石器が大量に出ている。

5. 考察

エル・パラシオはワリ期の遺跡であり、約250年間の長期間にわたって機能した。カハマルカにおいてはワリ期とインカ期の間には平行関係が見られる。つまり行政センターはあるが、それ以外の遺跡からはワリの土器や建築はほとんど認められない。ワリの支配の証拠は点として現れ、面として確認できるわけではない。その理由はカハマルカ社会と、インカ、ワリという国家社会



図41 Cajamarca Floral Cursive
(カハマルカ中期 C、内側)



図42 Cajamarca Black-and-Orange
(カハマルカ後期、外側)



図43 Cajamarca Black-and-Orange
(カハマルカ後期、内側)



図44 Cajamarca Semicursive
(カハマルカ後期、外側)



図45 Cajamarca Semicursive
(カハマルカ後期、内側)



図46 Cajamarca Semicursive
(カハマルカ後期、三脚)



図47 ワリ様式土器



図48 ワリ様式土器



図49 海岸カハマルカ (外側)



図50 海岸カハマルカ (内側)



図51 北海岸系土器



図52 橙色胎土多彩色土器

の関係から説明すべきである。いずれにせよカハマルカはワリ国家の直接的支配下であり、ワリのいくつかの遺跡で確認されているカハマルカ文化の土器は、ワリ国家の支配下におけるミティマエスのような人の動きに起因するだろう。ペルー北海岸ヘケテベケ川下流のサン・ホセ・デ・モロにワリの要素が現れるが、それはカハマルカ経由で入ったと考えられる。

いまだエル・パラシオ遺跡の中核部がどこにあり、どこから建設が始まったかは分からない。B区データの、カハマルカ中期BのはじめのA.D. 700頃更地で建設が始まったことを示している。ピラコチャパンパはA.D. 650-700という短い期間に建設され、建設途中で放棄された[Topic 1991; Topic and Topic, 1985: 30, 2001: 206]。そうするとピラコチャパンパの放棄年代と、エル・パラシオの建設開始年代がほぼ合致する。ワマチュコ地方で出土するワリ様式土器がMH1B期のものが主体であり、同時期のカハマルカ中期AのCajamarca Classic Cursiveが出土していることもつじつまが合う。もちろんピラコチャパンパの放棄年代の推定自体が間違っており、エル・パラシオと同様A.D. 950年頃に放棄された可能性もある。しかしトピックが想定するように、A.D. 700年頃に放棄されたとすると、ワリとペルー北高地の関係が弱まった [Topic 1991:162] のではなく、それを境にペルー北部高地におけるワリの支配の拠点はワマチュコからカハマルカに移ったことになる。これを解釈するのに、ペルー北部を俯瞰して一つの作業仮説を提示したい。

ペルー北海岸のモチエ文化の政治体制について、現在多くの研究者はヘケテベケ以北の北のモチエと、チカマ側以北の南のモチエに大きく分けられるという解釈を採用している。そして北のモチエはA.D. 700頃崩壊し [Shimada 1994]、一方南のモチエの中心であるモチエ遺跡はA.D. 800年頃まで継続した [Chapdelaine 2001, 2002]。この年代的差異は何を意味するのであろうか。筆者は次のような仮説を持っている。ワリは当初、南のモチエを征服しようと試みていた。そのため

モチエ川沿いに下るための拠点としてワマチュコにピラコチャパンパの建設を開始した。ところが南のモチエがかなり強かったため、戦略を変更し、北のモチエを征服しようとした。そのためピラコチャパンパを放棄し、拠点を北に移しヘケテベケ川に下るためにカハマルカ盆地にエル・パラシオを設置したのではないか。

インカとワリの間ではいくつかの点で平行関係が認められる。最後にインカ期の行政センターを取り上げ、ペルー北高地におけるワリ期の社会動態を考える一つのモデルを提示したい。カニエテ川沿いにインカワシというインカの行政センター遺跡がある。シエサ・デ・レオンによれば、ゲアルコという民族集団を征服するために設けられた拠点であり、新クスコ、と呼ばれた。ところが目的が達成されると、すなわちゲアルコの征服後、インカによって壊され放棄された[シエサ・デ・レオン2006：第60章]。同様なことがピラコチャパンパも起こったのではないか、というのが私の仮説である。今後状況を積み重ね、同僚の考古学者に意見を求めながらこうした解釈を精緻化していきたい。

エル・パラシオ遺跡の調査はまだ始まったばかりであり、今度しばらく調査を進める予定である。

謝辞

本稿は2007–2009年度科学研究費補助金（若手研究（A））、南山大学2009年度パツヘ研究奨励金 I-A-2による研究成果である。

引用文献

Castillo, L. J.

2001 La presencia de Wari en San José de Moro. *Boletín de Arqueología PUCP* 4 (2000) : 143–179.

Chapdelaine, C.

2001 The Growing Power of a Moche Urban Class. In *Moche Art and Archaeology in Ancient Peru*, edited by J. Pillsbury, pp. 68–87. National Gallery of Art, Washington.

2002 Out in the Streets of Moche: Urbanism and Sociopolitical Organization at a Moche IV Urban Center. In *Andean Archaeology I: Variations in Sociopolitical Organization*, edited by W. H. Isbell and H. Silverman, pp. 53–88. Kluwer Academic / Plenum Publishers, New York.

Cieza de León, P. (シエサ・デ・レオン)

1553 [2006] 『インカ帝国史』増田義郎訳、岩波書店。

Glowacki, M.

2002 The Huaro Archaeological Site Complex: Rethinking the Huari Occupation of Cuzco. In *Andean Archaeology I: Variations in Sociopolitical Organization*, edited by W. H. Isbell and H. Silverman, 267–285. Kluwer Academic/Plenum Publishers, New York.

Isbell, W. H.

1988 City and State in Middle Horizon Huari. In *Peruvian Prehistory*, edited by R. W. Keatinge, pp. 164–189. Cambridge University Press, Cambridge.

2001 Huari y Tiahuanaco, arquitectura, identidad y religión. In *Los Dioses del Antiguo Perú 2*, edited by K. Makowski Hanula, pp. 1–37. Banco Crédito del Perú, Lima.

Julien, D. G.

1988 *Ancient Cuzimancu: Settlement and Cultural Dynamics in the Cajamarca Region of the North Highlands of*

Peru. Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology, University of Texas at Austin.

Lau, G. F.

- 2005 Core-Periphery Relations in the Recuay Hinterlands: Economic Interaction at Chinchawas, Peru. *Antiquity* 79: 78-99.

Lumbreras, L. G. (ルンブレラス)

- 1974 [1977] *The Peoples and Cultures of Ancient Peru*. Translated by B. J. Meggers. Smithsonian Institution Press, Washington. (『アンデス文明－石期からインカ帝国まで』増田義郎訳、岩波書店)

Menzel, D.

- 1964 Style and Time in the Middle Horizon. *Nawpa Pacha* 2: 1-105.

Ravines, R.

- 1985 *Cajamarca Prehispánica: Inventario de Monumentos Arqueológicos*. Inventarios del Patrimonio Monumental del Perú 2. Instituto Nacional de Cultura de Cajamarca, Corporación de Desarrollo de Cajamarca, Cajamarca.

Reichlen, H. and P. B. Reichlen

- 1949 Recherches Archéologiques dans les Andes de Cajamarca. *Journal de la Société des Américanistes* 38: 137-174.

Schreiber, K. J.

- 1992 *Wari Imperialism in Middle Horizon Peru*. Anthropological Papers No.87. Museum of Anthropology, University of Michigan, Ann Arbor.

Seki, Y., J. Ugaz and S. Watanabe

- 2001 *Informe Preliminar del Proyecto de Investigaciones Arqueológicas en el Valle de Cajamarca, Perú*. Informe preliminar presentado al Instituto Nacional de Cultura, Lima.

Shimada, I.

- 1994 *Pampa Grande and the Mochica Culture*. University of Texas Press, Austin.

Terada, K., and R. Matsumoto

- 1985 Sobre la cronología de la Tradición Cajamarca. In *Historia de Cajamarca 1: Arqueología*, edited by F. Silva Santisteban, W. Espinoza Soriano and R. Ravines, pp. 67-89. Instituto Nacional de Cultura - Cajamarca, Cajamarca.

Topic, J. R.

- 1991 Huari and Huamachuco. In *Huari Administrative Structure: Prehistoric Monumental Architecture and State Government*, edited by W. H. Isbell and G. F. McEwan, pp. 141-164. *Dumbarton Oaks Research Library and Collection*, Washington D.C.

Topic, J. R. and T. L. Topic

- 1985 El Horizonte Medio en Huamachuco. *Revista del Museo Nacional* 47: 13-52.
2001 Hacia la comprensión del fenómeno Huari: una perspectiva norteña. *Boletín de Arqueología PUCP* 4 (2000) : 181-217.

Watanabe, S. (渡部森哉)

- 2002 Wari y Cajamarca. *Boletín de Arqueología PUCP* 5 (2001) : 531-541.
2007 「ペルー北部高地、パレドネス遺跡の発掘調査-2006年」『古代アメリカ』10: 67-98.
2009 La cerámica caolín en la cultura Cajamarca, en la sierra norte del Perú : el caso de la fase Cajamarca Media. *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 38 (2) : 205-235.

Watanabe, S. and J. L. Peña Martínez

- 2009 *Informe del Proyecto de Investigación Arqueológica en El Palacio - Cajamarca, 2008*. Instituto Nacional de Cultura, Lima.

Zapata Rodríguez, J.

- 1998 Arquitectura y contextos funerarios wari en Batán Urqu. *Boletín de Arqueología PUCP* 1 (1997) : 165-206.

